

中世海村の生業暦

春田直紀

Working Calendars of Coastal Villages in the Middle Ages
HARUTA Naoki

はじめに

- ① 対象海村と検討史料について
- ② 負担物からみた中世海村の二二ヵ月
- ③ 生業暦による海村の類型化
- ④ まとめ—中世海村の特質

【論文要旨】

これまで中世村落の一年は、農事暦が形づくる農民の四季として描かれてきた。しかし、農業に内部化しない外部的複合の生業パターンをもつ海村においては、海辺という立地環境に応じた生業の組合せによる一年の生活サイクルがあったはずである。本稿では、越前・若狭の中世海村を対象に、負担史料をもとに生業暦を復元し、各月の特徴を把握するとともに、生業の複合のあり方から海村の類型化を試みた。それにより、つぎのような中世海村の特徴を明らかにすることができた。

一、中世海村における稲作の比重は総じて低く、所領単位として浦を設定した領主は、海村に固有の機能を期待したと考えられる。海村固有の機能は、塩・海産物の供給、島作物・山野の産物、養蚕による絹、狩猟による獣皮など多岐におよぶが、これらの諸機能が一つの海村で全て果たされたわけではなかった。

二、中世海村の生業暦は、漁撈・製塩・島作・稲作・養蚕・狩猟・採集などが季節的に組み合わされて構成されている。この生業暦は、稲作の農事暦に他の生業活動が組み込まれる複合のあり方とは異なり、複数の生業が横並びで併存する外部的複合のあり方を示している。複合の様相は海村ごとに違い、生業の組合せ方で海村を四

つに類型化した。

三、製塩と漁撈の組合せを生業構成の基本とする海村の負担体系のプロトタイプは、塩と小魚の月別負担とワカメ・鮭桶に代表される季節的負担によって構成される。負担物の納期が一時期に集中しないところに、複数の生業暦がずれながら重なり合う海村の生業構造の反映を読みとることができる。

四、中世海村の負担は、年始・歳末の礼物や五節供・神祭の節料などの「参物」系統と、季節の旬の産物による「成物」系統とに二分できる。礼物とそれに対する下行は、浦と領主との双務的な関係を再確認させ、祭礼における節料負担は生業の権益を保障する役割を果たした。「成物」の納入には領主による細かい指示がみられ、消費者としての領主の姿がうかがわれる。

五、中世海村の生業活動と資源利用を保障する方式には、①資源利用休止期間の設定、②領主による下行と出挙、③代物・代納制の採用などがみられた。

【キーワード】中世海村、生業暦、越前・若狭、村落類型、外部的複合生業